

ミゾカクシ



鴨部戸構地区にて

(撮影：桐原真希)

私がこの1センチほどの小さな花と初めて出会った場所は、千葉県流山市でした。

しかし、そこは宅地開発が進み、田畑がめっきり減りました。そして、鳥取に来てからミゾカクシと再会できた時、とても嬉しくて思わず指先で花にそつと触れました。その後、県内各所でこの花を確認しましたが、どこにでも咲いているわけではないようです。そのミゾカクシが南部町で普通に生育していることがわかり、見かける度にホッとしています。

ミゾカクシは、アゼムシロとも呼ばれ、我が家の植物図鑑をめくると、7冊にはミゾカクシで、4冊にはアゼムシロで紹介されています。この和名は、田んぼの畔に溝を隠すほど広がって生えることや、むしろを敷いたようによく茂ることに由来しています。

日本全土と中国やインド、東ヨーロッパなどに分布し、江戸時代の書物「草木図説」にも登場しており、古来より日本で咲き続けている花です。しかし、草丈が大人の指ほどで、畔の草刈りが行われて

いないと、すぐに他の成長の早い植物に隠されてしまいます。また近年、里山植物の多くは外国からやってきた帰化植物に圧倒され、在来種の草花は激減しています。そんな中で、ミゾカクシの花は、田んぼの維持管理がされている畔によく咲いているように思います。

その一方で、休耕田でも湿地になつていると群生していることもあり、ミゾカクシの生育は田んぼ周辺の環境と密接な関係があるようです。

そして、ミゾカクシはキキョウ科の仲間では珍しく、花が半分欠けたような個性的な姿です。中国では「半边蓮」という生薬名で、半分の花というイメージから名付けられたそうです。全草に含まれているアルカロイドに抗がん作用があるということで、中国では抗がん漢方として利用されているとか。しかし、家庭での使用は危険なので、安易に食べないようご注意ください。小さな草の持つ秘めた能力を知ると、畔に咲く花を見るのがより楽しくなりそうです。

自然観察指導員 桐原真希